
百鬼夜行少女

彼方 叶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百鬼夜行少女

【Nコード】

N0677L

【作者名】

彼方 叶

【あらすじ】

《ショートストーリーノベルス》

少女が引き連れる奇々怪々な百鬼夜行。

少女が廻り廻る百物語的寓話達。

旧現代的テイストで送る不思議短編集。

第一怪 「人魚の記憶」

第一怪「人魚の記憶」

「うん、それはきっと人魚だね」

皮肉的シニカルに笑いながら、その娘は言った。

私はこの少女と二人きり、石畳の牢屋の中、頭上の天井の隙間から僅かに注ぐ月光に照らされている。

何故こんな事になったのか、わからない。

明らかであるは女を見た事だけだ。海上で歌を口ずさむ女を。

笑っていた。私に向けて笑いかけたのだと思った。

彼女は、泳ぎなど無縁な私が見てもわかるほど完璧且つ優雅な泳法で波打ち際までやって来た。

どことない距離から見ていた私もそこに、女にゆっくりと近づいてゆく。近づいてみると、女は、女と呼ぶにはまだ幼さが残った表情をしている事、ずぶ濡れの衣服が身体に張り付いている事がわかった。

まだ少女とはいえ、その艶やかな身体の線を見ると気持ちが高ぶると同時に何か後ろめたさを感じた。

目のやり場に困ったので、取り敢えず顔を見た。

笑っていた。

にっこりと。

愛おしかった。

私は。

その後。

私は。

どうした。

わたしは。

何を。

ワタシハ。

ここからだ。

ここから思い出せない。

頭が痛い。私は頭を押さえ、うずくまった。

「大丈夫？ 頭痛いの？」

その声に、私は牢獄の現実に戻された。

私は大丈夫だと言い、少女を見た。

私は思考した。

気が付いたら、この暗く狭い所にいた。

その後、少女もいるのに気付いた。

そして、ここまでの記憶をたどしくも説明したのだ。

人魚。

少女は人魚ではないかと言った。

そうだっただろうか。

言われて見れば、そんな気がする。

だが人魚というのは陸地にああやっていられるものなのか。

いや、そもそも夢なのではないか。

この無機質な部屋に放り込まれた只の犯罪者の夢なのではないのだろうか。

そうになると、目の前の少女こそ幻想だという事になる。

となると、この牢屋の感覚自体が夢の可能性も捨て切れない。

まさか私はもう事切れており、ここは既に死後の世界なのか。

まずい、思考が論理の最果てに及んでいる。
私は垂らした頭を上げ、再度少女を見た。

少女は微笑みこう言った。

「どう？ 頭の中は整理できた？」

私は「まだだ」と言いながら、一つの新たな可能性を思いついた。
この少女こそが例の人魚ではなかるうか。

必死の思考の後の考えだったから、どうもそんな気がしてならなくなってしまうた。

今思い返せばこんな顔形をしていた気がする。

衣服が変わっているのは、海に浸かって濡れていたからだろう。

そうだ。そうに違いない。

きっと混乱している私をからかっているのだ。 何故記憶が飛んだのか、こんな所に二人きりで閉じ込められているのか。

幾つか疑問は残るが、この少女が先程の女と（本当に人魚であるかは別にして）同一人物である事は確信に満ち溢れていた。

私は「君がその人魚ではないのかい」と尋ねた。

「へえ、そういう考えも有りには有りかも」

人魚の少女はそんな事を言い、続けてこうも言った。

「どうかな？ 色々な可能性を模索していくの楽しくなかった？」

脈絡の無い台詞であったが、私は否定できなかった。

「じゃあ、こんなものはどうでしょう」

そう言いながら、人魚は小さな瓶をどこからともなく取り出した。中には何やら赤々とした液体が入っているのが薄暗いなかから見えた。

「じゃーん、これこれ何だか分かる？」

私は素直に分からないと言った。

「ふっふっふ、聞いて驚け。これこそが、かの有名な人魚の血なのだ！」

心底驚いた。

人魚の血にもそうだが、何より少女の元気の良さに、だった。

「あなたはきつと生粋の学者肌よ。飽くなき探究心ってやつがあるんだろっね。という訳で、そんな学者様の探究心を満たす為の人魚の血なんだよ」

飽くなき探究心。

とてつもなく惹かれた。

そんな綺麗な言葉では表せない。

思考に貪欲。

今の私には、そちらの方が似つかわしい。

思考が快感だった。

自分の頭の中で幾つもの仮定が構築される度に、新たな可能性に

心が躍った。

その仮定を一つずつ潰していき、真実に近付いたような気がするのに、言い表せない程の快樂があった。

人魚の血。

不老不死の秘薬。

飲めば永遠に思考できる。

時間など気にしなくて済む。

しかし、それは人間をやめるといふ事ではないか。

否、これは私に与えられたチャンス機会なのだろうと思う。

私は人間をやめる。

しかし、それは始まりでもある。

私は永久不滅の賢者となり、思考の海を泳ぐのだ。　その人魚

のように泳ぎ続ける。

その意味では、私も人魚となるのかもしれない。

きつと、幸せに違いない。

「はい、どうぞ。　人魚の血だよ」

私は少女の手から小瓶を受け取ると、一気に飲み干した。

鉄の味がし、喉に異様な感覚が伴ったが全く問題なかった。

気が付くと少女は消えていた。

しかし、気にならない。

もうそんな事は下らなくなっていた。

いや、今はそんな下らない事にも時間を割けるのだ。

そうだ。本当に下らないのは、その”時間”なのだ。

自然と笑いが込み上げてくる。

可笑しくって仕方がなかった。

これからの永遠が楽しみでならなかった。

一人の賢者は閉じられた牢獄で永遠に笑っていた。

あれからどれ程経ったのか。

どれ程思考したか。

今だに牢獄にいる。

時間は余る程あった。

しかし、思考の数は永遠に追い付かなかった。

考える事が無くなったのだ。

苛々する。する事がない。

そのせい、脳を使わなくなったからか思考に埋もれていた記憶が蘇る。

笑っていた。

にっこりとだ。

私は近付いた。

彼女を人間とは違うものだと思った。

衣服を纏ったまま泳いでいた事。

息継ぎをしていなかった事。

重力を無視し海上に座っていた事。

距離的に有り得ない声量の歌声。

思考は、彼女を異形とするに及んだ。

真実を確かめたくなつた。

思考通り人間ではないのか。

思考通りなら死なないのか。

その細い首を絞めてみた。

顔や身体を殴る蹴るしてみた。
腹を切り開き内臓を確かめた。

私は。

殺した。

わたしは。

人魚を。

ワタシハ。

急に恐ろしくなった。

私の身体の中に流れているのは、私がこの手で惨殺した人魚の少女の血なのだ。

この事を思い出させる為の永遠だったのではないか。

私の脳を極限まで空にして。

そしてそれから。

もう厭だ。

恐ろしい。

今にも私を内側から人魚の血が溶かしているように錯覚した。
まさか、本当に毒の作用が。

厭だ。 厭だ。

考えたくない。

思考したくない。

時間は腐る程ある。

駄目だ。 耐えられない。

死ななければ。

頭を打ち付けるか。

喉を掻き切ってみるか。

腕を食いちぎってみるか。

死ねば。

死ねば解放される。

死ななければ。

死ななければ。

死ななければ。

死ねない。

首が折れても元に戻る。

死ねない。

喉を掻いても血肉が再生する。

死ねない。

食した腕は根本からまた生える。

死にたい。

死にたいんだ。

殺してくれ。

第一怪「人魚の記憶」完

第二怪 「幽霊の重さと近代雑踏」

第二怪「幽霊の重さと近代雑踏」

その少女、彼女はとても可愛らしい。

今はまだ十代の半ばか、それくらいだろう。

だからもう少し経てば、彼女に対する形容は”可愛い”から”美しい”に、その容姿と共に変化するのであろう。

誤解しないで欲しいのだが、私は決して少女趣味な訳ではない。

極めて一般的な感想だ。

そうだな、親の気持ち、なのだろうか。

私は子供を持った事がないから分からないが、この感覚はきっと娘を持つ父親の気持ちのそれであろうと思う。

我が子の成長を見守るそれだ。

ところで、私は今その少女と町の雑踏を歩いている。

ふと気付くと彼女がおり、私を散歩に誘うからだ。

初めて出会った時も、気付いたらそこに居た、という風だ。

そして、もしも歩いている私達を誰かが見ることが出来たならば、大いに奇異な光景に違いない。

ここで一つ、それについて注釈しておかねばなるまい。

彼女は”幽霊”なのだ。

彼女がそう言った訳ではない。

私の勝手な想像か妄想か幻想、錯覚だ。

ともかく彼女は周りの人間、私以外だが、に姿が見えないのだ。霊にも、亡霊、死霊、生霊、守護霊、浮遊霊、地縛霊。

はたまた、妖怪や悪魔、良ければ天使の部類とも思ったのだが、やはり単純に”幽霊”がしっくりきたのだった。

彼女に最初出会った時、私は恐ろしい程に無感動だったのをよく覚えている。

どういう訳か、私は大して驚きもせず、この半透明な少女の事を受け入れ、話し相手になっていた。

今思えばもつと驚いてよかったものだ。

雑踏の中、みんな私達二人を無視している。

正確には、彼女は勿論見えないのだし、私のような取り留めもない人間に話し掛けるような通行人も皆無という事だ。

私達二人だけの世界のような気がした。

恋人同士という意味ではなく、父娘のようなという意味でだ。そして、彼女は唐突に私に話し掛け、それに私は応えた。

周りの人間に奇異な目を向けられない程度に。

「そういえば、人間の魂は21グラムらしいよ」

へえ、そんな事があるのか。不思議なものだな。

「どうして不思議？」

一体どうしたら魂の重さが分かる？ 不思議じゃないか。

「死ぬ前と死んだ後の体重を比べるそうよ」

ほう、興味深いな。皆が皆、その分軽くなるのか？

「どうかしら、それに実際は重さなんて無いんだから」

ん？ 何だって？

「だって意味無いじゃない。魂に重さがあつたって」

意味が無い？

「そう、もしも魂に重さがあつたら、例え21グラムだとしても世界は魂で飽和するに決まってる」

何だか凄い事を言うね。でもじゃあ、その21グラムは何処に逝くんだ？

「21グラムは心なのよ、心、魂とは違う」

心と魂？ 話がやけに込み入ってきたな。

「死体になると身体と心が分離するの。心は消え、重さの無い魂は空気中に投げ出される」

今この街中にも魂が無尽蔵に放り出されてると？

「さあ？ そんな事分からないわよ。兎に角、帰ったら体重計に向かわないとね。もしかしたら針が振れないかも」
怖い事を言わないでくれ、その手の話は苦手なんだ。

「さっきまで普通に聞いてたのに、急に何？」

自分自身に降り懸かる怪奇災難は勘弁してくれ、という事だよ。

「自分に甘いんだ？」

そうかもしれない。話を聞いて気になったのだが、君は魂だけかい？ それとも分離した心？

「・・・さあ。一体何だろうね。さて、今日はもう帰ろ」

・・・分かった、帰ろう。また来るのかい？

「多分ね」

その後一週間、彼女は私の元には訪れなかった。

こども来ないとなると、どうも落ち着かない。

心配だ。何かあったのだろうか。

私は幾度となく、彼女との最後の会話を反芻していた。

やはり。

私が良くない事を言ったのだろうか。

会話の最後の方の彼女はとても淋しそうだった。

私は彼女が魂なのか、それとも心なのか問うた。

もしかしたら聞いてはならない問いだったのかもしれない。

その問いより前の会話に遡ってみる。

魂の重さ。

それに行き着いた。

体重なんて普段計らないのに無性にそれが気になった。

私という存在は、心か、魂か、人間なのか。
異様に気になり、そしてある仮定を恐れた。
今まで大して気にならなかったような事が頭脳を駆け回った。
私は、彼女以外の誰かと最近言葉を交わしたか？
私の事など眼中に無かったのか？
私はそれを確かめる為に体重計を持ち出した。
それとは、すなわち自身の存在。

自然と動悸が速くなる。

片足を上げる。

一瞬躊躇いそれに乗せる。

もう片足も乗せる。

今度は躊躇わない。

ゆっくりと計りの数値を見る。

数値は。

どうだ。

針は。

どうか。

針。

針が。

針は、振れていた。

私は、ふうと息を吐き安堵した。
生きている。

私には重さがある。

21グラムなどより遙かに重い。

そう、私は人間なのだ。

私は言い知れぬ喜びに気分が高揚した。
急に外に飛び出したくなった。

気付くと、私は少女と最後に歩いた雑踏を駆けずり回っていた。半ば狂乱したかのように人々の中を駆け抜けていた。どうしようもないくらい嬉しい。

何故こんな心地になったか全く分からない。

私は人間だ。この上ない程人間だ。

周りの奴らとは違うのだ。

あんな零グラム達とは違う。

私を無視する礼儀を知らない奴ら。

ただ黙々、淡々、漠然と生きている、いや、死んでいる靈魂共とは一切合切が異なっている。

こうして、他人の顔を殴っても問題無い。

刃で刺そうとも。

恥辱を与えても。

どれだけ何をしても。

無い。

問題無い。

責任も義務も束縛も。

何もかもが消失している。

唯一在るのは、私自身の存在と私の為の自由。

私は駆ける。

新たなる自由の街を。

私は。

私は気付いた。

故郷は廃墟。

雑踏の幻想。

魂の群れ。

生きているのは私一人。

少女との最後の会話を反芻する。

心と魂は違う物。

魂に心は無い。

だから喋らない。

魂に重さは無い。

何故なら存在しないから。

それが零グラムの意味。

気付いても、尚独りで街を駆け回る。

そんな私は、完全に狂乱していた。

第二怪「幽霊の重さと近代雑踏」完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n06771/>

百鬼夜行少女

2010年10月14日15時03分発行